Title	オランダ・国際社会史研究所を訪問して
Author(s)	平野　泉
Issue Date	2014-04-17
Type	Working Paper
Series Title	共生社会研究センター　ワーキング・ペーパー
Serial Number	1
Right	CC3.0 BY-NC-ND

立教大学共生社会研究センター
ワーキング・ペーパー　No.1
2014-04-17

オランダ・国際社会史研究所を訪問して

立教大学共生社会研究センター　学術調査員
平野　泉

１．　はじめに

2013 年 9 月 10 日-11 日の日程で、オランダ・アムステルダムの国際社会史研究所（Internationaal Institut voor Sociale Geschiedenis（蘭）／ International Institute of Social History（英）、以下、英語での略称 IISH を用いる）を訪問する機会を得た。

この訪問の目的は 3 つあった。

（１）世界有数の社会運動アーカイブズである IISH のアーカイブズ業務について知ること

（２）IISH に事務局を置く International Association of Labour History Institutions (IALHI) が主導した国際的プロジェクト、Heritage of People's Europe (HOPE) について知ること

（３）IISH が所蔵するフランスの運動体 Solidarité のアーカイブズを閲覧すること

幸運なことに、（１）に関してはアムステルダム大学名誉教授の Eric Ketelaar 氏のご紹介により、Public Services 部門マネージャーの Jack Hofman 氏に、（２）に関しては IALHI ウェブサイト上のメールアドレスから Marien van der Heijden 氏に連絡がつき、お話を伺うことができた。また（３）の資料も、簡単な手続きでまったく自由に閲覧させていただき、２日間にわたる IISH での訪問調査は非常に充実したものとなった。

本稿では、まず機関としての IISH について概要を記してから、上記の目的に沿って簡潔に訪問の成果を報告することとしたい。

２．　国際社会史研究所（IISH）とは

IISHの正式設立は 1935 年 11 月 25 日。それに先立つ 1914 年、経済史家であるNicolaas Willem Posthumusがオランダ経済史アーカイブズ（Netherlands Economic History Archives: NEHA）を設立、企業史料のみならず労働運動の資料も積極的に収集していた。しかし 30 年代、急速にヨーロッパの政治状況は悪化していく。社会運動・労働運動が各地で弾圧され、組合や運動家の資料は押収や散逸の危機に瀕していた。そうした資料を救出・保存するため、社会民主主義運動と親密な関係にあった企業家Nehemia de Liemeの財政的支援を受けて設立されたのがIISHである。IISHは危機に瀕した社会運動資料を救出・保存し、その公開を通して社会史研究の推進に貢献することをミッションとし、ミハイル・バクーニンの手稿 [1]をはじめ、社会主義思想家・運動家の重要なアーカイブズをナチスの手から救った。また最も貴重なコレクションの一部をイギリスに移転することで、ナチス占領という危機

からも資料を守った。しかし 1940 年 7 月、オランダ占領から 2 ヶ月後にIISHは閉鎖。アムステルダムのコレクションはドイツに持ち去られ、戦後まで戻ることはなかった[2]。

その後 1950 年代の戦後再建期を経て、IISH は 1960～70 年代、社会運動史への関心の高まりを追い風に大きな発展を遂げた。1989 年、増大し続けるコレクションとスタッフを収容すべく現在の建物に移転するとともに、NEHA と物理的に統合された。

2012 年の年報によれば、年間予算規模は 8,737,512 ユーロ、スタッフ 120 名、年間来館者数は 4,937 名、目録化されたアーカイブズは 679 件である[3]。スタッフ 2 名の共生社会研究センターに比べれば巨大とも言えるIISHだが、Fisher（1988）によれば、1950～60 年代のIISHはスタッフも少なく、組織図すら必要ないくらいだったという。コレクションが大きくなり利用者も増える中で、徐々に図書館部門と、cabinetsと呼ばれる地域・主題別の資料収集・整理・公開を担当するセクションが生まれてきたという。その後さらに利用者・スタッフともに増加しても、この基本構造には変化がなかった。1973 年にアーカイブズ部門が独立したにもかかわらず、資料収集や整理に関しては依然としてcabinetsが担当しており、その結果としてcabinetsは資料に関するありとあらゆる仕事をこなさねばならず、研究に割ける時間は勤務時間の 10～15%にとどまっていた。そのため 1983 年に業務効率化のための組織再編が決定され、（１）研究部門の独立、（２）コレクション関連業務の統合、（３）分業化の徹底、を目指した新たな組織編成が 1987 年から採用された。その結果としてIISH全体の業務効率化が図られるとともに、研究成果としての出版物の量も増えたという[4]。

現在、IISHはその財源の大部分をKNAW （Koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen: オランダ王立芸術科学アカデミー）の支出（2012 年度総予算約 873 万ユーロのうち、KNAWの拠出額が 843 万ユーロ）に頼っている[5]。しかしコレクションに関してはIISH財団が所有権を持っており、KNAWはコレクションの問題に口をはさむことができない構造になっている。とはいえ膨大なコレクションを守り抜くこと、そしてそれを拡大させ続けることはIISHのような規模の機関にとってすら容易ではない。徹底的な内部評価ののち、第三者評価を受けた上で作成された"Strategy For 2013-17"では、財政基盤の弱さ・人員不足・コレクション増大という課題に対処するための評価の概要と、それを踏まえた今後の戦略が提示されている。そこでは、これからのIISHが持てる資源を集中すべき活動として、（１）研究、（２）データ収集、（３）デジタル・アーカイブズの収集、（４）データや情報の処理・分析のための洗練された方法論の採用（e-Humanities）、が挙げられ、紙媒体資料の収集努力は今後縮小させていく方向となったことが窺える[6]。

いっぽう第三者評価でも高い支持を得たのが、1999 年にIISH内部で生まれたGlobal Labour History（以下、GLH）コンセプトに基づく多様な研究プロジェクト群である。GLHは、「ヨーロッパ中心主義、そして方法論的な一国主義を超え、さらに 1550 年から 2000 年までの時代をカバー」し、必要とあれば自然科学とも連携することで、労働研究に「新しい地平を切り開」くものである。現在、労働関係史のグローバルな共同研究、価格や賃金などの膨大なデータ・ハブ、その他様々な国際的比較研究などがIISHの研究者・IISHと連携する大

学等の研究者を中心に、世界各地で同時展開している[7]。

３．IISHにおけるアーカイブズ業務について

では、IISH のアーカイブズで働くアーキビストは、どのような方針で、どのように仕事をしているのだろうか。IISH の Public Services 部門のマネージャーである Jack Hofman 氏にお話を伺った。

当日朝、受付で Hofman 氏とお約束があることを告げると、受付からその旨が連絡され、しばらくすると Hofman 氏が階段を下りてきた。建物の中 2 階、運河に面した一面ガラス張りの窓から光が差し込むカフェテリアで温かい飲み物（無料）をゲットして、アーカイブズの受付と閲覧室の間を通り、氏のオフィスへ案内された。明るく広々としたオフィスに、執務用のデスクのほか、ちょっとした打ち合わせのできるテーブルがある。Hofman 氏は筆者からのメールを読んで、いろいろと準備してくださっていたようで、メールのプリントアウトとノートを見ながら気さくにお話をしてくださった。そのまとめを以下に記す。

（１）収集方針

基本的には「社会史」に関するもの、ということになるが、それでも広すぎるので、現在は労働と労働関係を中心に収集している。収集担当は Collection Building 部門で、様々な団体や組織，個人と連携を取りつつ、オランダ・東西ヨーロッパを中心に，ラテンアメリカ、アフリカなどの資料を収集している。現在はグローバリゼーションも大きなテーマとして持っているので、これまで弱かった東南アジアなどでの収集活動にも力を入れている。海外での収集には、現地のコンタクトや特派員、そしてボランティアの力を借りることが多い。そうした地域の運動家は、運動家であるとともに知識人であることが多いからである。

（２）編成・記述

できる限り国際標準に従っている。アーカイブズに関しては ISAD(G)に準拠して EAD を用い、図書館資料については MARC を使っている。

（３）評価・選別

現代の運動体資料に共通する特徴として、コピーを大量に含むことがある。IISHでは、まったくファイルされていないコピーについては基本的に処分している。また、幅広のリングファイルやドッチファイルも場所ばかり取るので、中の文書だけをフォルダ等に移動し、ファイルは処分している。運動体が他の団体から収受した資料については、ファイルに綴じ込まれていたり、それに対して何かアクションを起こした形跡があったりすれば保存するが、そうでなければ処分している。例えばIISHが定期的にアーカイブズの移管を受けている労働団体として、*Dutch National Trade Union Organization*[8]がある。この組織には複数の組合が加盟しているが、そうした加盟組合のアーカイブズには、*Dutch National Trade Union Organization*の発行文書が当然のことながら相当量含まれている。そのため加盟組合のアーカイブズを受け入れる場合、そ

の中に含まれる*Dutch National Trade Union Organization*の発行文書については事前に処分してもらうようにしている。

また、運動体のアーカイブズに含まれている公刊された資料については、これもファイルの一部をなしていれば保存するが、そうでなければ、貴重と思われるもののみ図書館へ、それ以外は処分している。さらに、運動体は何でも切り抜いて取っておく傾向があるため、アーカイブズはスクラップブックを含むことが多い。しかしオランダでは新聞記事のデジタル化が急速に進んでおり、近年中にオランダ全紙の記事がデジタルで読めるようになる。そのため切り抜きには資料価値がないと判断し、基本的に受け入れていない。

４）電子記録について

小規模だが対応を始めている。IISHは"Strategy For 2013-17"でデジタルの問題に踏み込むことを宣言しており、そのためにIISH自身がまずTrusted Digital Repository[9]になる必要があるが、その基盤はまだできていない。将来的には、大きな団体については全てデジタルで寄贈してもらう（つまり紙は受け入れない）ことを可能とするための態勢を整えたいと考えている。

５）プライバシーと著作権

プライバシーに関しては、寄贈者との契約と関連法規によって判断している。利用者には、資料に登場する人々の権利に十分に配慮するよう求めるだけで、文書にサインしてもらうようなことはしていない。誰でも当然配慮しなければならないことを、特別に文書にする必要はないからだ。

著作権については、利用者自らが処理するように指示している。著作権者を利用者に尋ねられて知っていれば教えるが、そうでなければ IISH はいっさい関与しない。対応しきれないからである。

また、オランダでは著作権法上、アーカイブズ等が保存のための複製をすることは認められているが、スキャンしたものをウェブに掲載すれば著作権侵害になってしまう。こうした状況に対する IISH のポリシーは、「とりあえず載せて、何が起こるかを見てみる」ことだ。というのも、IISH のコレクションはほとんどが 20 世紀以降のものなので、著作権法を厳格適用していては、「誰かがいつかコレクションの存在に気づいて閲覧のため訪れるのを待っている」以外のことは何もできなくなってしまう。慎重に、しかしリスクを取っていく必要があると考えている。

６）ボランティアについて

ボランティアの主戦力は，退職した職員である。退職後、時間もあるので資料の整理をしたいという人は相当数おり、重要な戦力となっている。また、資料寄贈団体から資料整理のために派遣される人もいる。あるいは歴史学を修めたが就職先のない人が,「ただ失業しているよりは資料に触る仕事をしたい」と言ってくることもある。基本的に誰でもというわけにはいかないので、面接をして、やってもらうことが決まった

らまず 1-2 ヶ月作業をしてもらい、訓練し、評価して，長く取り組んでもらうかどうかを決めるようにしている。きちんと仕事ができないと判断した人には、その段階で辞めてもらう。交通費のほかに少額の謝礼も支払うようにしているが、賃金に代わる報酬、何か仕事を続ける動機付けになるようなことを、それぞれのボランティアが得られるよう心がけている。

こうしたお話を伺った後、「そういえば申し訳ないけどあと 20 分で会議があって」という Hofman 氏は、それでも書庫を案内して下さった。膨大な資料の全てが中性紙のフォルダとボックスに収納され、整然と並んでいる。アムネスティ・インターナショナル（国際事務局）、グリーンピースなどの国際的 NGO のアーカイブズの量には圧倒される思いがした。

４．HOPE プロジェクトについて

さて、本稿冒頭で述べたとおり、IISH にはInternational Association of Labour History Institutions (IALHI)の事務局が置かれている。2010 年 5 月からは、IALHI参加機関を中心とした国際的プロジェクトであるHeritage of People's Europe（HOPE）の事務局もIISHに置かれることになった。ヨーロッパ 11 ヶ国の労働史・社会史関係アーカイブズ 15 機関が所蔵するデジタル・オブジェクト（テキスト、画像、音声、動画）と、所蔵資料のメタデータを横断検索できる枠組みを構築するとともに、EUの文化遺産総合ポータルであるEuropeana[10]にデータを提供することを主目的としたこのプロジェクトは、EUから約 260 万ユーロの助成を得て 3 年間で完結。2013 年 5 月、約 90 万のデジタル画像とメタデータを新規開設した社会史ポータル（Social History Portal: SHP）及びEuropeanaにアップした。IALHIは、国際社会史ポータルの維持とさらなる充実のため法人組織を立ち上げ、新たな資金獲得によるプロジェクト継続を目指しているところである。ウェブ上で公開されているHOPEのプロジェクト・ドキュメントから見えるプロジェクトの概要は以下の通りである。

（１）プロジェクトの背景

ヨーロッパの労働・社会運動はそもそも国際的な性格を有しており、運動体の資料も国境を越えて分散したり、相互に補完し合ったりしている。しかしそうした資料を所蔵するアーカイブズ機関の規模が比較的小さく組織的基盤が弱いこともあり、ウェブ上で複数機関のコレクションを横断検索することは難しい状況が続いていた。また IALHI は、労働史ポータル（Labour History Portal）を通して労働運動資料の機関横断検索を部分的に可能としていたが、検索の結果、ユーザーがウェブ上でデジタル・オブジェクトを閲覧することはできなかった。

（２）HOPE プロジェクトの目的

- Europeana にコンテンツを提供し、メタデータ・アグリゲータとして機能すること

- 社会史関係資料の共通レポジトリを構築すること
- コンテンツ、メタデータ、そしてサービスの質を向上させること
- 社会史関連機関のコミュニティがプロジェクトに関わること
- 労働史ポータルをヴァージョンアップすること
- ベスト・プラクティス・ネットワークを構築すること

（3）システムとメタデータ

このプロジェクトでは、参加機関から集めたデータについて、プロジェクトで構築するポータルサイトから検索可能にするほか、ヨーロッパ最大のデジタル文化資源ポータルであるEuropeanaにもアップすることが目指されていた。そのため、最初からEuropeanaデータモデルとの整合性が考慮されていた。また文化資源記述に関する様々な国際標準（ISAD(G)、MARC、IGMOIなど）のほか、電子記録の保存・公開システムのモデルであるOAISや、保存メタデータPREMISなど、現時点での様々な国際標準に準拠したベスト・プラクティスを機関間で共有することも目指していた。そしてこうした標準を参照しながらも、社会史・労働史資料の特徴にふさわしいメタデータとは何かを国際的に協議した[11]。そして組織規模や人的・財政基盤の異なる参加機関の個別のニーズを反映しつつも、相互運用可能なシステム設計が行われた。その結果として、世界中のユーザに対し、膨大な資料へのアクセスを提供することが可能となったのである[12]。

プロジェクト事務局を務めたIISHのMarien van der Heijden氏は、現在中国の運動資料を担当されているアーキビストで、IALHIの実務も長く担当されてきた。同氏によれば、ヨーロッパの労働運動資料所蔵機関の協力関係は紙の時代から続いており、自機関の利用者が存在に気づいていない他機関の所蔵資料へ利用者を導くことができるような関係を相互に築いてきたという。2007年にはLabour History Indexをウェブ公開し、関係機関所蔵資料について一定程度の横断検索も可能にしていた。しかし今回のHOPEで初めて、ユーザが検索結果からデジタル化された文書に直接アクセスすることが可能になったそうだ。

また、プロジェクトが複数の民間アーカイブズの共同事業として遂行され、そうした機関の間でベスト・プラクティス・ネットワークを構築できたことは非常に重要だったという。EUの助成金はこれまで公文書館や公立図書館に支給されることが多かったが、ある一定のテーマの資料を持つ民間機関がネットワークして、単一機関ではできないことに取り組むというHOPEプロジェクトは、「EUがこうした民間アーカイブズの基盤作りを支援するためのよいチャンスだったのではないか」と氏は推測する。もう一つ重要な点として、ヨーロッパでは国家レベルのプロジェクトでも取り組まれていなかった永続識別子（Persistent Identifier）の付与という取り組みも、EUにアピールしたようだとのことだった。

IALHIは法人格を持たないため、EUとの関係でプロジェクト引き受け機関となったのはIISHであり、SHPのサーバーもIISHのサーバー内部に置かれている（プロジェクト遂行中

に作成される様々なドキュメントも、IISH のサーバー上で保存・管理されていた)。しかし、将来的にプロジェクト成果としての SHP を維持管理・改善していくにはさらなる外部資金の導入が必要であり、そのために IALHI 自身が法人格を取得し、助成金等の受け皿になれる態勢を整えた。このような態勢整備によって、新たな助成を獲得し、SHP をさらに洗練されたものにする方法、単なる検索エンジンであることを超えて、よりよくコレクションを表象できるようなものにしていく方法を模索していかなければならない。また、IISH の Global Labour History プロジェクトとも関連して、さらにビッグデータや e-Humanities をめぐる動向をも追い風として、「SHP を研究・分析の道具としていかに発展させて行くかが重要な課題」だと van der Heijden 氏は語る。そのためにも SHP はヨーロッパという地域を超えて大きく踏み出す必要があるとのことで、「日本からの参加も大歓迎です。IALHI の会員であれば（会費は年 100 ユーロ)、SHP に資料情報やデジタル画像をアップできますし、技術的なサポートもしますよ！」とのお誘いを受けた。世界中から多言語でアクセスできるプラットフォームを、年間 100 ユーロで利用できるのなら―とかなり心が動いたが、現在の共生社会研究センターの態勢では持続的な参加やデータ提供は困難と思われた。今後の課題である。

５．Solidarité アーカイブズの閲覧

さて、最後に一利用者として、IISH 所蔵資料を閲覧してみた経験を記そう。

そもそも IISH の資料を利用するには、身分証を提示する必要すらない。1 階でバッグやコートをロッカーに入れて、あとは入館者台帳に名前を記入するだけで、この記入も、じつは任意である。開架の参考図書や直近の雑誌は自由に見て回れるし、書庫の資料も、館内の PC で検索して請求すればわずかな待ち時間で出納される。図書は PC 画面からオンラインで請求、アーカイブズ資料は請求票に記入してカウンターに提出し、出納を待つ仕組みになっている。

今回請求したのは、*Solidarité*という運動体のアーカイブズである[13]。これは、フランスの活動家、アンリ・キュリエル（1914-1978）をリーダーとする運動体で、日本では高橋武智氏の著書『私たちは脱走アメリカ兵を越境させた.....ベ平連／ジャテック、最後の密出国作戦の回想』（作品社、2007 年）で、脱走兵支援運動に関連して言及されている。全体で 4 箱しかない小さな資料群で、Finding Aidsを参照しながら、とりあえず日本やベトナム戦争に関係のありそうなフォルダを数件請求してみた。しかし結局のところそのフォルダを含む箱ごと出納されるので、3 箱分の資料をざっと眺めることになった。持ち出しさえしなければ利用にはまったく制限がなく、写真撮影も自由であった。

この小さなアーカイブズは受け入れ（accession）ごとに編成されているようで、まず以下の 4 つにまとめられている。

- Dossier recu 1995　（1995 年受け入れ文書）

- Supplement 1996　　（1996 年追加分）
- Supplement 1997 (première partie)　（1997 年追加分、第 1 次）
- Supplement 1997 (deuxième partie)　（1997 年追加分、第 2 次）

この下に「アフリカ関係文書、1970-1980」といったタイトルの付されたまとまり（＝dossier）があり、その下が各フォルダ（chemise）である [14]。オリジナル・フォルダのフォルダタイトルの記入等がある部分を切り取って、「orig」（オリジナル）と鉛筆で記入して保存してある場合もある。また、フォルダ内の小さなまとまりも、薄葉紙（色つき）ではさむことで保存されている。

運動体としての*Solidarité*の活動自体を研究しようというわけではないので、とりあえず「JATECやベ平連がどこかに登場しないか？」と、ベトナム関係、東南アジア関係のフォルダを選んで資料をめくっていたが、請求した箱の最後の方、フォルダ 49-50 "Formation"（養成）[15]を開き、少し読んでみて驚いた。それは、世界各地で植民地解放・民族解放運動に取り組む運動家たちに運動の理論と技術を伝える養成課程の資料だった。運動を支える思想や、組織の作り方、メンバーの安全確保、警察の尋問への対処などの様々なコース（Cours）が用意されているのだが、そのひとつである「Cartographie」のコースで教えられていたのが、まさに文書の「変造」技術なのである。

ベトナム戦争時代の日本で、戦うことを拒否して脱走したアメリカ兵を支援した人たちがいた。軍隊から逃げてきた若者をかくまうとともに、彼らを日本国外に脱出させなければならない。そのためにはパスポートが必要だ。高橋氏はそのための手がかりを得るべく 1970 年春にヨーロッパへ渡り、パリでパスポート変造の技術を学び、帰国されたのである。さて、”Cours”と手書きされ、”I - Introduction”とタイトルが付された 15 ページほどの資料によれば、文書変造の入門コースは 2.5 時間から 3 時間と、氏の著書に「せいぜい二時間半」[16]とあるとおりであった。「完璧なものではなく、本当らしいものをつくればいい」[17]という考え方も（vraisemblenceの重要性）、スタンプを「点描」のように仕上げていく手法も簡潔に記載され、図示されている [18]。高橋氏が学んだ文書変造の精神と技術は、同じ時代、民族解放運動に関わる世界中の運動家たち、高橋氏と同じく*Solidarité*に支援を求めた人たちの誰もが学んだ技術でもあったのである。

帰国後、高橋氏にこの「発見」を伝え、撮影してきた資料のデータをお送りした。しばらくして高橋氏からお電話をいただいた。撮影した資料の最初の方、Folder 2 に 1971 年 10 月の年次大会におけるキュリエルの報告があり、「そこに僕のことが書いてあると思うんですよ」と高橋氏。確認してみると、アメリカの若者たちによる反戦運動への支援について述べたあとで、確かにアメリカ脱走兵を支援している「notre ami japonais われらが日本の同志」のことが語られている。

On gardera aussi présent à l’ésprit le travail de formation et d'élaboration fait avec notre ami

japonais: Ambroise, dont résultat est la présence à Paris, de notre ami David que certains d'entre vous connaissent bien- son séjour a pour principal objet d'assimiler le maximum des expériences de S en vue de la tranformation du groupe japonais d'aide aux déserteurs américains en groupe d'aide aux Mouvements de Libération Nationale asiatiques.

（仮訳）われらが日本の同志Ambroiseに対してなされた、研修（formation）とそのさらなる深化（élaboration）にまつわる活動についても記憶にとどめよう―その結果としてわれらの同志David（皆さんの中にも彼をよく知る人がいるはず）がパリに来ることになった―彼の滞在は、アメリカ脱走兵を支援する日本の団体を、アジアにおける諸民族解放運動を支援する運動に変容させるべく、S（olidarité）の経験を最大限に吸収することが主たる目的であった[19]*。*

高橋氏のお話では、このAmbroiseこそ高橋氏に与えられたフランス名だったという[20]。

ベトナム平和運動が「越境」する。越境した人は、越境した先で人に出会い、支え、支えられる。そうした運動の実相を文書を通してかいま見ることができるのも、日本の「誰か」が JATEC 資料を長年保存し、ヨーロッパの「誰か」が *Solidarité* の文書を長年保存してくれていたからだ。JATEC 資料も、*Solidarité* 資料も、残された量はわずかである。しかしわずかでも保存され、資料保存機関に寄贈され、整理され、公開されることによって、当事者以外誰も知ることのなかった交流のすがたが、時を超えて、誰にでも開かれたものとなる。運動が越境すれば、記録も越境する。その当たり前の事実の意味と価値をあらためて考えさせられる経験であった。

６．　おわりに

アムステルダムで宿泊したホテルは中央駅の近く、飾り窓地域のそばだった。ホテル前の細い通りには、毎晩夜中まで世界中のありとあらゆる地域からやってきた人びとがそぞろ歩き、飲み食いし、騒いでいた。コーヒーではなくマリファナを求める若者が coffee shop にたむろし、オフィスへ急ぐ若い女性が、飾り窓のすぐそばにある保育園に子どもを預けていく。駅を背にこの通りを少し歩けば、そこはもうアムステルダムの中心、ダム広場だ。最高級ホテルと第二次世界大戦の戦没者記念塔と王宮が並ぶこの広場に、今も昔もあらゆる人びとが集い、あらゆる言葉で話し、フライドポテトをほおばり、兵士を悼み、王宮に感嘆し、大道芸を眺め、様々な政治的意見に耳を傾ける。そうした国際都市としてのアムステルダムのすがたと、「そもそも社会運動は国境を超えるもの」という前提に立ち、そうした人びとの歴史にこだわり続ける IISH の精神は地続きに見える。歴史と伝統が約束する地位に甘んじることなく、新しい技術や発想を柔軟に受け入れ、変化に適応しようとしている IISH が今後、アムネスティ・インターナショナルやグリーンピースなど、国際的で大

規模な NGO の電子記録をどのように受け入れ、管理していくのか。そして国境を超える社会運動の記録をインターネット上でつなぐ HOPE プロジェクトの将来はどうなるのか。そうした点も含め、IISH の活動にこれからも注目していきたい。

◆本報告は、科学研究費補助金（(基盤（B)）2010～2013 年度)「国際比較に基づくアーカイブズと社会の関係に関する総合的研究」(課題番号：2233164、代表者：藤吉圭二（高野山大学)）の成果の一部である。

---

[1] Bakunin, Michail Aleksandrovič. *Michail Aleksandrovič Bakunin Papers*. Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis.　http://search.socialhistory.org/Record/ARCH00018

[2] "Working for Labour. Three quarters of a centry of collecting at the IISH. " In: Kloosterman, Jaap and Lucassen, Jan. (eds.). 2010, *Rebels with a Cause: Five Centuries of Social History Collected by the International Institute of Social History*. Amsterdam: Aksant, pp.7-28.

[3] International Institute of Social History. *Annual Report 2012.* http://socialhistory.org/sites/default/files/docs/annualreport2012.pdf

[4] Fisher, Eric J., 1988, "The International Institute of Social History- Reorganization after fifty years. " *International Review of Social History*, .33(2), pp.246-255.

[5] 上掲注 Annual Report 2012, p.11.

[6] Wals, Hans. 2013, *International Institute of Social History- Strategy for 2013-2017*. ver.1.0. Hofman 氏より 2013 年 9 月 10 日付 e-mail で受信。

[7] International Institute of Social History, 2011, *A Global Player: The International Institute of Social History 2007-2011 and Beyond.*

[8] このように英語で話されていたが、Federatie Nederlandse Vakbeweging（FNV）のことか？ http://search.socialhistory.org/Record/ARCH00419/ArchiveContentAndStructure

[9] Research Libraries Group, 2002, *Trusted Digital Repositories: Attributes and Responsibilities.　An RLG-OCLC Report*. Mountain View. http://www.oclc.org/content/dam/research/activities/trustedrep/repositories.pdf?urlm=161690　IISH が関わった HOPE プロジェクトにおける Trusted Digital Repository の考え方については Deliverable 2.4: *Best Practice for Trusted Digital Content Repositories*. 29 May 2012.を参照。 http://www.peoplesheritage.eu/pdf/D2-4-Grant250549-HOPE-BestPracticesTrustedDigitalContentRepositories2-0.pdf

[10] Europeana サイト：http://www.europeana.eu/

[11] HOPE Deliverable D2.2: *The Common HOPE Metadata Structure, including the Harmonisation Specifications*. 31 May 2011.　http://www.peoplesheritage.eu/pdf/D2_2_Metadata%20Structure.pdf

[12] HOPE に関する記述は、HOPE ウェブサイト（http://www.peoplesheritage.eu/）　からアクセスできるプロジェクト・ドキュメントおよび The Hope Wiki（http://hopewiki.socialhistoryportal.org//index.php/Main_Page）に基づきまとめた。とくに最終報告書である Delivarable 7.3: *Hope Final Report*. 05 July 2013（http://www.peoplesheritage.eu/pdf/D7_3_HOPE_Final_report.pdf）は簡潔にまとまっており参考になった。

[13] 検索結果は http://search.socialhistory.org/Record/ARCH01986/Description. 高橋武智氏と初めてお会いし、ご著書を拝読してから *Solidarité* の名で検索してみて、IISH にアーカイブズが所蔵されていることがわかったのだから、アーカイブズ記述を最初に読んだのは 2011 年ではないかと思うのだが、すでに定かではない。しかもその時のアーカイブズ記述には、「関係者からの寄贈」であることや、「閲覧は XX 年まで制限」とあったように記憶しているのだが、現在の記述にはそうした気配すらない。Hofman 氏のお話では、Finding Aids は随時更新されているとのことだが、現在公開されている記述も 2006 年の日付であり、筆者の記憶違いかもしれない。

[14] コンテント・リストもオンラインで確認可能。 http://search.socialhistory.org/Record/ARCH01986/ArchiveContentList

[15] Solidarité. Solidarité Archives. International Institute of Social History. Folder 49-50. Dossier Formation.

[16] 高橋武智, 2007,『私たちは脱走アメリカ兵を越境させた.....ベ平連／ジャテック、最後の密出国作戦の回想』作品社,　p.87.

[17] 同上、p.86.

[18] Solidarité Archives, Folder 49, Dossier Formation. Chemise: Formation: Cours. “Cartographie.”
[19] Solidarité Archives, Folder 2, Rapports de Henri Curiel aux congrès annuel.1962-1977, Chemise: Octobre 1971. “Activités de Solidarité.” p.15.
[20] 2014 年 3 月 15 日付メール、高橋（2007）での言及は p.94.

（上記 URL はいずれも 2014 年 3 月 26 日最終確認）